

1. 田本氏の哲学的問い

田本氏の哲学的問いは、現今の教育が独立した我を教育対象として前提している点に向けられている。これに対し教育が独立した子を対象にすることはあり得ない、との新木氏の反論があり、現今の傾向がそうであるとすれば問題である、とされた。

2. テキスト

「物理現象の背後にあるもの」（旧全集第 4 巻『働くものから見るものへ』所収）55 頁後ろから 1 行目～57 頁後ろから 3 行目まで。

3. テキスト要約（論点）

前作「直観と意志」では働くこと（意志）と見ること（直観）を自覚において統一することが試みられていた。「物理現象の背後にあるもの」では物理現象を自覚の立場から説明しようとする。「二 実在認識の根柢としての意志の自覚」では特殊が一般を含む「意志」によって経験界（44 度で燐が溶ける）が成立し、その「意志の自覚」によって知識の客観性のもととなる自覚（「私は考える」という純粹統覚の総合）が成立する、とされる。その自覚の（働くことと知ること）の統一の形式が「実在（ある）の範疇」である。「感覚の背後に自己を見出す（＝自覚する）」ことによって我々はものが「ある」と認識するのである。こうして西田は「実在の範疇」を「意志の自覚」に基づける。

次いで西田は再び「物の変化」に立ち戻って考察を開始する。「物の変化」が成立するためには物の「独立性」と同時にそれが「他と一」でなければならない、とされる。個物の独立性が成立するためには、第一に個物が「主観を離れて存在するもの」でなければならない、第二に他との無限の関係に入り得るために「無限なる述語の主語」とならなければならない。西田はこうした「個物概念」を「意志の自覚」から導き出そうとするが、そのためには「立場の超越がなければならない」という。この「超越」の解釈を巡って我々の考察は難渋を強いられ、今回では一定の解釈に至らなかった。

論点を示す。「我を超越」＝「我によって、如何ともすることのできないもの」＝「後より我を覆い、我を内に包む」＝「作用の作用の立場に於いて対象化」＝「赤の知覚作用自身が客観化」→「色を物の作用として見ることができる」。この内「作用の作用」とは〈働くことを見ること〉で自覚のことであろう、ということになった。赤の知覚作用自身は客観化できないということを別にすれば、作用自身を客観化することで自覚が成り立つことは一応理解できる。結局我々の作用（意志）の投影がどうやら主観を超えた「個物」だと言っているようだが、その論拠がハッキリしないのである。作用を反省することが自覚になることは分かるが、それが客観化されて「物」になるというのが分からないのである。この謎を解くカギが「我によって、如何ともすることのできないもの」＝「後より我を覆い、我を内に包む」であろう。ここに「超越」の秘密がある。

読書会ではこの箇所を「イメージ」として読む説や「包むもの」は「自然」であるという説が提出されたが、さらに論理化する必要があるとされた。

佐野記